だを動かしてすごすこと、心を通わす喜びを育て、広げ、深めることが大切です。そして、こころが指し示す方向をしっかりと受け止めていれば、あたまの働きも、こころといのちの働きを守り強めることもできるのです。

（東京女子医科大学第二病院）

存在（ある）ことの嬉しさを伝える

―言葉の世界から―

佐塚　公代

私は二十年近く、地域の子ども達やお母さんやお年寄り達と、絵本を読んだり昔話を語ったりして過ごしています。それは息子達との言葉のかけあいから始まりました。長男は三か月位から「ウ

グーン」とか「ウディア」とか大きな声を出して叫びました。五か月目になると「マンマ、マンマ」とハッキリ言うようになりました。その度に私は「そうよママよ」と声をかけて喜びました。赤ちゃんが訳の分からない声を発した時に、そばに居る大人が意味付けをして返します。それも自然に喜びを持って応じます。六か月になると「ウックンウックン」と、鼻と喉を使って話し掛けて来るようになりました。話をしたがっているのが良く分かります。そこで「お話し上手ね、ウックンウックン」と応えると、また「ウックンウックン」と繰り返します。まるでコダマのように親子の声が呼応しあい、そして気分の良い時には「タラッタラッタラッ」とリズムをつけて唄のように繰り返します。この時期には親への愛情も強くなり表情も豊かになるにつけ、周りの大人の言葉かけが子どもの成長に大変な影響を与えるのだと実感する日々でした。

そんな子育ての中で、たくさんのわらべ唄に出会いました。次の「にんどころ」もそうした中の一つです。

ここは　とうちゃん　にんどころ
ここは　かあちゃん　にんどころ
ここは　じいちゃん　にんどころ
ここは　ばあちゃん　にんどころ
ここは　ねえちゃん　にんどころ
だいどう　だいどう
コチョ　コチョ　コチョ

「にんどころ」とは「似ているところ」と言う意味であり、それは子どもの顔をタオルなどで拭いてあげる時の可愛がり唄です。「ここは

父さんに似ているね」と唄いながら頬を拭いてあげる。「ここは母さん似だね」「ここは爺さん似だね」……と次々と拭いて行き、「だいどう、だいどう」と顔全体を拭きます。「だいどう」とは「一家一門が繁栄している」と言う意味です。そしておしまいに「コチョコチョ」と、子どもの腋の下を擽り笑わせる。このわらべ唄には、繰り返しの言葉の何とも言えない、温かさと充実感があり、心が満たされます。家族の皆に何処かが似ていて、愛されながら今ここに居るのは、永い命の紐なのです。

こうした内容の唄を口伝えしながら親子の日常が進められたら、どんなに幸せでしょう。生活の中でこんな育児の唄を伝えて来た昔の人達の智恵と感性には、まさに驚くべきものがあります。顔を拭くと言う実用的で、子どもにとって時には苦痛な時間が、地方特有の語調とリズムを伴って唄うことで、聞く耳を楽しく訓練しユーモアも教えて、人間として生きて行く上で大切な事を伝えます。その時に幼い子ども達は、この内容を理解していませんが、それでも良いのです。そうした雰囲気・空気の中で育てる事が必要なのです。子どもの文化は、肌の触れ合いや遊びを通して伝えられて来た、人々の智恵です。こうした昔から伝えられて来た智恵が借りれず、子育ては益々難しくなっています。幼い子ども達と、どのように生活し可愛がって良いのか、わからないお母さんも多いのです。一人きりで幼い子どもと向かい合い、不安な日々を送っている若いお母さんがたくさん居る中で、わらべ唄が非常に減ってしまっているのは、人間にとって何と言う損失でしょうか。

しかし現在も、言葉を声として蘇らせて子ども達に素直に受け入れられている詩人が居ます。その代表的な一人が谷川俊太郎さんです。福音館書店発行の絵本『めのまどあけろ』は、長新太さんの絵を伴った現代版わらべ唄です。そこには朝起

きてから夜寝るまでの、幼い子ども達の一日の生活が楽しい詩で綴られて、わらべ唄を知らないお母さんも、自分流の節で自然に唄ってしまうようなリズムがあります。たとえば「にんどころ」と同じ顔拭き唄の部分は、こんな調子です。

ほっぺたのはらに　あめがふる
おでこのかおに　あめがふる
はなのやまにも　あめがふる
めとめのいけにも　あめがふる
たおるでふいたら　あおぞらみえた

声に出して絵本を読んだり唄ったりすると、自分自身が明るくなり子育ても楽しくなります。心地よい言葉は、それを語る者と聞く者の心を温め育みます。

また詩や童謡による語り部として、まどみちおさんも子ども達やお母さんに長く親しまれています。至光社出版の絵本『いっぱいやさいさん』は、生きとし生けるものが愛されて存在しているのだと伝えてます。

きゅうりさんは
　きゅうりさんなのが　うれしいのね
すずしそうな　みどりの　ふくに
　きらきら　びーずを　いっぱいつけて

次のページには玉ねぎさんに「玉ねぎさんは玉ねぎさんなのが　うれしいのね」と語りかけます。こうして次々に野菜達を登場させて、それぞれに「あなたは　あなたなのがうれしいのね」と繰り返します。この絵本を読み聞かせする時、子ども達やお母さんの表情が徐々に嬉しそうに

なって来るので、読んでいる私まで幸せになり、おしまいには聞いている子どもの名前を借りて「～ちゃんも　～ちゃんなのが　うれしいのね」とつい語りかけます。そうすると幼い子ども達は「ウン」と頷いてくれ、いつ迄もこうして素直に頷いて欲しいと願うのです。ただただ「うれしいのね」と言っているだけなのに、子どもの心をこんなにも満たしていけるのです。

本当に心が素直になる一つの言葉に出会えれば良いのですから、多くの言葉は必要としません。それは宮沢賢治が『注文の多い料理店』の序文で述べている、「すきとおったほんとうのたべもの」となる言葉や物語との出会いなのです。母親が子どもの為に心を込めて、語りかけ・絵本を読み・お話をするならば、きっと子どもは「すきとおったほんとうのたべもの」となる言葉や物語に出会って、母の声と一緒にその言葉や物語を、人として生きる上で欠かせない栄養として、心の奥深くに蓄えるでしょう。家庭や地域で絵本を読み昔話を語りその場の空気が一つに融けあう時に、子ども達からピカピカの笑顔が送られ、お年寄りから昔の思い出話を贈られて、人は言葉を使い立場と時間を越えて共に存在（ある）と確信でき満ち足りた気持となれるのです。

（けやき文庫主宰）